公益の風 #28

東北公益文科大学　理事長補佐
鈴木孝純

公益大学よ、地域とともに「大きく育て」！

長い間、日本の大学は高度な専門的学術研究をするところというイメージが濃く、「まちづくり・地域づくり」といった公共的役割には関心を示すケースが少なかったように思います。このような雰囲気の中の2001年4月、持続可能な地域社会を整備し、まちや地域全体、そして何よりも全住民全体の暮らしをより良くすることこそ最大課題であるとして、公設民営方式で開学したのが東北公益文科大学です。大学施設は地域・住民への開放を前提に設計・建設され、キャンパス内の四方には門も塀もなく、開学当初から地域との連携、相互貢献を旗幟として掲げてきました。

ところで、私にとって特にここで思い出されるのは、ドイツ・バーデン＝ヴュルテンベルク州にある「大学街」として有名なテュービンゲンです。この地を8回ほど訪れましたが、中世の美しい歴史的建物が多く保存されており、豊かな自然の中にある文化と歴史の芳醇を感じさせてくれました。街にあるテュービンゲン大学は1477年の創設で、ヘルダーリン（詩人）、メーリケ（詩人）、ヘーゲル（哲学）、シェリング（哲学）、ケプラー（天文学）を輩出するなど、今でも人文科学および社会科学において伝統的な実績を誇っています。また、1863年にはドイツで初めての理学部が設置され、自然科学や生命科学の分野でも確固たる地歩を築き、これまでにノーベル賞受賞者も十数名を数えます。街の人口は約9万人で、うち約3万人は学生です。街のいたる所に大学のシンボルマークである「椰子の木」の紋章を掲げた教室や研究室があり、肉屋の2階が教室だったり、文房具店の上階が心理学の研究室だったり、古城の中も大学の考古学研究室や博物館として使用されるなど、街を歩けば至る所で大学施設に出くわします。また、街の中を流れているネッカー川の観光渡し舟の営業権益は、何と学生連盟です。公園や川筋のベンチなどにはテキストを広げて勉強する学生の姿が見受けられ、街全体が大学のキャンパスなのです。「大学街」として注目される所以は、街の人口に占める大学生の多さではなく、数百年にわたって大学と街が自然な姿で互いに溶け込み合いながら共生・共存しているからなのです。

かつて、公益大学の開学を半年先に控えた2000年9月、当時酒田商工会議所会頭で公益大学設立準備委員の新田嘉一氏（現公益大学理事長）が酒田市広報号外「マイ タウンズ キャンパス」に記した巻頭言『自立と共生が「公益」を促す』に次のような檄文の一節があります。

「今私がもっとも強く感じていることは、地域も人々も、これほど自立する意欲に乏しく、しかも共生する心も欠いてしまった時代は、これまで無かったと思います。もたれ合いや依存心は、経済をも衰退させます。利益という目的があっても、一人ひとりが、社会を築き地域をおこす主体であるとの意識を持つことが必要です」。

新田氏の言葉には、大学開学の喜びに浮かれずに、疲弊する地域を活性化するためにも、地域と大学が連携・協働することによって双方が変革や再生を行いながら、共同体としての「大学まちづくり」に邁進していかなければならないという、前述のテュービンゲンの共生・共存にも似た時代を見越した強い決意が表れていると思います。

開学の年の3月24日、校舎横では「大きく育て」の願いのもと、500人を超える市民などによって苗木約4000本が植樹された

敬天愛人2023年11月号Vol.176掲載（荘内日報社発行）